

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2008 ~ 2009

課題番号：20720054

研究課題名 (和文) 読本を視座とした近世中期歴史意識の研究

研究課題名 (英文) The study of the historical consciousness on a "Yomihonn" in the middle of Edo period.

研究代表者 三浦 一郎 (Miura Ichiro)

東北大学・大学院文学研究科・助教

研究者番号：70466514

## 研究成果の概要 (和文)：

史学史ないし史学思想史において従来空白期間として扱われてきた近世中期について、読本を視座として、歴史観より外延を広げた歴史意識という概念に基づいて再検討し、そこに、歴史や記録に残らない庶民の過酷な生に目を向けようとしたり、人間の生をめぐる理不尽さや不条理さを歴史の中に見出したりするような関心のあり方が窺えることを明らかにした。本研究ではその一端を示したに過ぎないが、こうした関心のあり方が、近世歴史意識に対する一般的な認識としてある鑑戒史観や皇国史観という枠に収まらないものであることは明らかである。本研究の成果は、そうした近世歴史意識に対する従来の見方を相対化し、修正するための第一歩として位置づけられる。

## 研究成果の概要 (英文)：

This study aimed to review the historical consciousness in the middle of Edo period that has been treated as a blank in the history of Japanese historical science. For this purpose, this study focused on the historical consciousness on a "Yomihonn" works in the mid-Edo period, and made it clear that there were a kind of historical consciousness that have noted past common people, who have no name in history, who had to live in a severe and absurd life like a war. This kind of historical consciousness is distinctly different from a nationalistic or ethical one as a generally accepted idea of the historical consciousness in the Edo period. This result will help to relativize and to correct a generally accepted idea of the historical consciousness in the Edo period.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,300,000	390,000	1,690,000

研究分野：日本近世文学

科研費の分科・細目：文学、日本文学

キーワード：日本近世文学、日本思想史、日本史、歴史意識、読本、軍書、通俗史書

## 1. 研究開始当初の背景

歴史意識を問うことは常に古くて新しい問題である。近年も中国、韓国をはじめ東アジア諸国との関係の中で日本人の歴史意識が改めて問題になったことは記憶に新しい。

近世の歴史意識は近代以降、現代に至る私たちの歴史意識に対して、誤解や歪曲を含めて大きな影響を及ぼし続けてきた。それと同時に、両者の間に差異が存在することもまた言うまでもない。近世の歴史意識とその変遷や多様性への考究を深めることは、現代を生きる私たちが自らの歴史意識を相対化し、見つめ直すための様々な手がかりを与えてくれるだろう。

なお歴史意識という用語・概念は、尾藤正英氏「日本における歴史意識の発展」(『岩波講座日本歴史 22 別巻1』(岩波書店、1963年4月)所収)の見解を踏まえたものである。尾藤氏は「歴史の全体をなんらかの意味において統一あるものと見る場合の、その統一の方式」であり、「歴史の意味についての問い」への解答となる歴史観ばかりでなく、必ずしも歴史全体を対象とせず、また論理的な明晰さや体系化も不十分な「自覚されざる意識」までを含んだ、歴史に対する意識全般についての緩やかな概念として歴史意識を定義している。

より一般的な、歴史観や歴史思想、歴史哲学などではなく、尾藤氏の言う歴史意識という用語・概念を採用するのは、以下にその意義を述べようとする日本近世中期の歴史叙述をめぐる問題の考究において、それが必要であり、かつ有効だと考えてのことである。その必要性、有用性については後述する。

近世の歴史叙述に関しては、日本近世史学史ないし史学思想史の領域で既に多くの議論が積み重ねられてきている。関連する主な研究書として史学会編『本邦史学史論叢』(富山房、1939年5月)、日本思想史研究会編『日本における歴史思想の展開』(東北出版株式会社、1961年8月)、坂本太郎著『日本歴史新書 日本の修史と史学』(至文堂、1966年11月)、芳賀登著『批判近代日本史学思想史』(柏書房、1974年5月)、小沢栄一著『近世史学思想史研究』(吉川弘文館、1974年11月)、野口武彦著『江戸の歴史家』(筑摩書房、1979年12月)などがある。他に、林羅山、山鹿素行、新井白石、荻生徂徠、頼山陽、あるいは『大日本史賛藪(論讚とも)』『大勢三転考』など、近世史学に密接に関わる人とその著述を多く取り上げた岩波日本思想大系があり、また尾藤正英「歴史思想」(同氏編『中国文化叢

書 10 日本文化と中国』(1968年7月、大修館書店)所収)、同「皇国史観の成立」(相良亨他編『講座日本思想 4 時間』(東京大学出版会、1984年8月)所収)など、歴史、文学、思想をテーマとする各種講座、叢書に収められた重要な論文も少なくない。

それらの中での議論は当然様々な観点から多様になされており、一口にまとめることは到底できないが、こと時代区分について言えば、概ね前後期の二期に分けて近世史学史ないし史学思想史を把握する立場が共有されているように見受けられる。寛文十年(1670)に幕府の修史事業として『本朝通鑑』が成ったこと、および新井白石『読史余論』(享保九年(1724)跋)の成立に一つの到達点を見るのが前期である。一般に、寛文十二年(1672)以降本格化した水戸藩による『大日本史』編纂が、本紀列伝までを脱稿しながら光圀没後に刊行計画を一時停滞させる頃、おおむね寛延年間(1748~51)あたりまでが近世史学史の前期と考えられているようだ。一方、後期の始まりを告げる出来事としては、寛政元年(1789)、彰考館総裁となった立原翠軒による『大日本史』刊行計画復興の建議が普通挙げられる。だとすれば前期と後期との間には、およそ半世紀にわたる空白があることになる。

確かにこの時期、『本朝通鑑』や『大日本史』の編纂に並ぶ修史事業も、『読史余論』『日本外史』に比肩するような史書も見当たらないのは事実である。しかし、この空白の半世紀にも歴史をめぐる多くの発言があったことは看過できない。水戸藩の修史事業が停滞した時期とちょうど重なるように、寛延二年(1749)刊の都賀庭鐘『英草紙』を嚆矢として新しい文学様式、読本が成立する。読本は周知の通り歴史と密接な関わりを持つ。その作品の多くに歴史に対する作者の問題意識がうかがえるし、作品そのものが、先行する史書あるいは歴史的事件や人物をめぐる同時代の発言を意識してなされた一つの主張ともなっている。またその読本前史として、「まとまった著述とならない断片的な歴史叙述が、文体の名称でいえば論・伝・記事・擬文などとして、漢学者の文集中にかなりの数残されており、特に徂徠学の登場以降、豊かな人間洞察力に基づき「倫理綱条史観の枠をはみ出す歴史趣味」の存在が認められるとの指摘が夙にある(日野龍夫「読本前史」、『日野龍夫著作集第一巻』(ぺりかん社、2005年3月)所収、初出『文学』48・6・7(岩波書店、1980年6・7月))。読本を視座とすることによって、ある歴史的な事

件や人物をめぐる同時代の様々な主張の位相関係を考えることが可能になるだろう。

読本とその周辺の歴史叙述の中に、歴史全体を見渡して論理的に体系化された歴史思想や歴史観を見出すことは難しいかもしれない。だが、そこにある個別の歴史的事件やその主要人物を対象とする問題意識や主張を、尾藤氏の言う歴史意識の一つと見て近世史学史の中に位置づけることで、前期と後期の間にあった空白を埋めることが可能になる。しかもそれは、いわゆる鑑戒史観や治乱興亡史観の枠に収まらず、また皇国史観とも異なるものであって、従来の近世史学思想に対する一般認識を相対化し、改めることが期待される。歴史思想として大きな差異が指摘される前期と後期の間にあって、この時期の歴史叙述とそこにかがえる歴史意識の諸相を、文学と史学という近代以降の学問領域区分を越えて洗い出すことは、大きな意義のあることだと考える。

本研究は、以上のような認識と問題意識に基づくものである。

## 2. 研究の目的

史学史ないし史学思想史において従来空白期間として扱われてきた近世中期の歴史叙述について、読本を視座として、歴史観より外延を広げた歴史意識という概念に基づいて検討し直す。またそのことを通じて、いわゆる鑑戒史観や皇国史観など、近世歴史意識に対する従来の一般的な見方を相対化し、修正するための手がかりを得ることを本研究の目的とする。

## 3. 研究の方法

近世中期の歴史意識について考究する上で、従来の時代区分で前期の終わりとしてされる時期とほぼ重なる寛延二年（1749）に刊行された、『英草紙』を嚆矢とする読本作品に注目する。

特徴として歴史と密接な関わりを持つ読本を視座とすることで、従来の歴史学では見落とされてきた近世中期の歴史叙述にかがえる歴史意識について、その諸相を拾い上げる。

## 4. 研究成果

史学史ないし史学思想史において従来空白期間として扱われてきた近世中期について、歴史観より外延を広げた歴史意識という概念に基づいて再検討し、そこにかがえる歴史意識の諸相を明らかにするという本研究の目的を達成するべく、二年間の研究期間中に、まず源平の争乱（治承寿永の乱）、南

北朝の争乱、藤原仲麻呂（恵美押勝）の乱などに関する読本、軍書など、資料の基礎調査と収集を行った。

また、それらの調査と検討による成果として、論文「浅茅が宿」を読む—やつれはてた宮木の霊の姿から—を学術雑誌『日本文学』第57巻第12号（2008年12月発行）誌上に、「歴史との対話—「白峯」論—」を学術雑誌『日本文芸論叢』第19号（2010年3月発行）誌上に、「信義の行方—「菊花の約」論—」を学術雑誌『文化』第73巻第3・4号（2010年3月）誌上に発表した。

「浅茅が宿」については、作者上田秋成が『重編応仁記』や『鎌倉大草紙』などの軍書を詳細に読み込んだ上で利用していることが既に指摘されている。前掲拙論「浅茅が宿」を読む」ではその指摘を踏まえ、戦争に翻弄された名もなき人々がどのように描かれてきたかという観点から軍記物語や軍書類と「浅茅が宿」とを対比し、本編に伺える歴史に対する興味関心のあり方を論じた。「浅茅が宿」は、軍書類の断片的な記述から（あるいはそれがなくとも）思いを馳せることのできる、しかし記録には殆ど何も残らなかった名もなき人々に戦乱がもたらしたものについて、ありえた歴史の一齣を描き出した作品と位置づけられる。そうした歴史や記録に残らない庶民の過酷な生に目を向けようとするところに、本編にかがえる歴史意識の特徴を指摘できるだろう。

「白峯」については、秋成が『保元物語』の流布本や異本、また『本朝通紀』『保建大記』など、多くの軍書や通俗史書を参照していることが既に指摘されているが、前掲拙論「歴史との対話」では、崇徳院の造形に関する「白峯」の選択がそのいずれとも完全には重ならないことを指摘し、そこに、常識的な倫理道徳とその規準自体はあるべき理として認めると同時に、そうした理が通らない、あるいは理によっては割り切れない現実の理不尽さが歴史上において繰り返されるありように対する秋成の強い関心が窺えることを論じた。

「菊花の約」については、その時代背景が『陰徳太平記』を典拠とすることが指摘されている。前掲拙論「信義の行方」では、「菊花の約」に、信義という美德を貫く人が報いられることの余りに少ない現実の理不尽さに対する憤りと嘆きが込められていることを論じ、『陰徳太平記』を想起させる時代設定は、陰徳陽報の発想とは対極にある本編の作品世界において、アイロニカルな響きを強く帯びていることを指摘した。

このように、読本を視座として見た近世中期歴史意識においては、いわゆる鑑戒史観や皇国史観とは異なり、歴史や記録に残らない

庶民の過酷な生に目を向けようとしたり、人間の生をめぐる理不尽さや不条理さを歴史の中に見出したりするような形での歴史への関心のあり方が窺える。本研究ではその一端を提示したに過ぎないが、これらの事例の報告は近世歴史意識に対する従来の見方を相対化し、修正するための第一歩として位置づけられる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3 件)

①三浦一郎、「信義の行方—「菊花の約」論—」、『文化』、査読有り、第 73 巻第 3・4 号、2010 年、pp. 19～37

②三浦一郎、「歴史との対話—「白峯」論—」、『日本文芸論叢』、査読無し、第 19 号、2010 年、pp. 1～12

③三浦一郎、「「浅茅が宿」を読む—やつれはてた宮木の霊の姿から—」、『日本文学』、査読無し (依頼原稿)、第 57 巻第 12 号、2008 年、pp. 62～65

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者 三浦 一郎 (Miura Ichiro)  
東北大学・大学院文学研究科・助教

研究者番号：70466514

(2) 研究分担者 無し

研究者番号：

(3) 連携研究者 無し

研究者番号：